

成人看護学実習における学生の学びと看護実践能力の関連

田中 初枝, 三ツ井 圭子, 眞鍋 知子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

本研究の目的は、成人看護学実習における学生の学びの内容から、看護基礎教育において培われる学生の看護実践能力を明らかにすることである。研究対象はA大学看護学科の3年次に成人看護学実習をおこなった97名の学生20グループの中間および最終カンファレンスのグループワークの記録である。そこから学生の学びを抽出し分析を行った。その結果、学生は成人看護学実習（慢性期）（急性期）の2つの実習をとおして、患者の健康段階および発達段階に応じた看護を判断し、実践することを学んでいた。成人看護学実習（慢性期）において学生は、患者に応じた看護を判断し実践に反映していた。成人看護学実習（急性期）では、術後の患者の回復が速く、学生は看護判断を実践に反映させることが難しいことがわかった。

キーワード：成人看護学実習, 学生の学び, 看護実践能力

Relationship between students' learning and nursing competence in adult nursing practicums

Hatsue Tanana, Keiko Mitsui, Tomoko Manabe

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

The purpose of this study was to clarify nursing competence acquired in basic nursing education from students' learning in adult nursing practicum. The records of the group work of the middle and the final conference of 20 groups of 97 students who practiced adult nursing practicum in the third-year of nursing department were analyzed. As a result, the students learned to judge and practice nursing according to the health stage and the development stage of the patient through two practicums of adult chronic nursing practicum and acute nursing practicum. In adult chronic nursing practicum, students judged what to do according to patients and reflected it in practicum. In the practical course of adult acute nursing, patients recovered quickly after surgery, and it turned out that it was difficult for students to reflect nursing judgment in the practicum.

Keywords: adult nursing practicum, students' learning, nursing competence

I. はじめに

少子高齢社会の到来、高度医療や在宅医療の推進をはじめとする社会情勢の変化は、保健医療福祉における看護の役割を拡大した。このような背景のもと社会のニーズに対応できる質の高い人材の養成が求められ、2002年文部科学省の看護学教育の在り方に関する検討会（第一次）で、看護実践の質向上のための人材育成として「看護実践能力の育成」に焦点をあてた検討がなされた¹⁾。2004年の第二次検討会では、

学士課程の教育課程について、看護実践能力の卒業時到達目標を取り上げる理由に、看護実践能力は学士課程卒業時に完結するものではなく、生涯にわたり向上するものである。したがって卒業時の到達目標は、卒業後の成長を保証するために、学士課程において修得しなければならない基本的な実践能力である²⁾と示した。加えて教育課程の特徴として、看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程である、創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ課程である、人間関係形成過程を伴う学習体験が中核となる課程であるなどを示している³⁾。このような検討を経て2011年文部科学省の「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」は、Ⅰヒューマンケアの基本に関する実践能力、Ⅱ根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、Ⅲ特定の健康課題に対応する実践能力、Ⅳケア環境とチーム体制整備に関する実践能力、Ⅴ専門職者として研鑽し続ける基本能力の5つの能力群と、20の看護実践能力を示した⁴⁾。これらは単独の能力ではなく、看護実践に必要な多面的な要素を含む総合的な能力としてとらえられる。対象者を理解し多様な価値を持つ人々との間に援助的関係を形成し、様々な健康問題を抱えた対象者に根拠に基づく看護を展開する能力は、看護実践場面をとおして育まれるため臨地実習が重要になる。この過程を経て身につけた看護実践能力は、卒業後も看護実践をとおして発達していく。したがって学生が実習においてどのような学びをし、看護実践能力を培っているか明らかにすることは意義がある。

これまでの看護実践能力に関する研究では、松谷ら⁵⁾はnursing competence, clinical competenceに関する英文献を検討し、看護実践能力の主要能力として人々を理解する力、人々中心のケアを実践する力、看護の質を改善する力の3つとその構造を示した。そして看護実践能力について、知識や技術を特定の文脈の中に統合し、倫理的で効果的な看護を行なうための主要な能力を含んだ特質であり、複雑な活動で構成される全体的統合的概念であると定義した。高瀬ら⁶⁾はnursing competenceを主題とした国外文献を検討し、看護実践能力の属性として個人適正、専門的姿勢・行動、専門的知識と技術に基づいたケア能力の3つを示した。そして看護実践能力について、看護実践における専門的責任を果たすために必要な個人特性、専門的姿勢・行動、そして専門知識と技術に基づいたケア能力という一連の属性を効果的に発揮できる能力と定義した。いずれも国外の文献検討により、看護実践能力の概念や構造を明らかにしているが、看護基礎教育でどこまで看護実践能力を身につけるべきかについては言及していない。金久保ら⁷⁾は看護実践能力、看護技術、主体的を含む国内文献を検討し、看護基礎教育における看護実践能力について、根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力に関して、学生を対象とした研究では、看護技術の体験を取り扱っていたものが多かったのに対し、看護職を対象とした研究では、看護技術を対象の状況に適応させる知識・技術の活用能力までを取り扱っており、質的な差がみられたと述べている。しかしここでも学生が卒業までに身につける看護実践能力については明らかにしていない。前述したように、看護基礎教育における看護実践能力は、人間関係形成過程を伴う体験学習を中核に、看護実践を学ぶ課程で培われるため、臨地実習での学びが重要となる。看護基礎教育課程における臨地実習は、各教育機関の理念をもとにカリキュラム編成し、専門分野Ⅰ、専門分野Ⅱ、統合分野実習合計23単位を学生の学習段階にそって展開するように構成されている。

その中で、成人看護学実習は6単位を有し、幅広い年齢層に対し、特定の健康課題に対応する機会が多いため、成人看護学慢性期および急性期実習（以下、成人看護学実習）における学生の学びの内容と看護実践能力の関連を明らかにすることは意義があると考えた。

Ⅱ. 研究目的

成人看護学実習における学生の学びの内容から、看護基礎教育において培われる学生の看護実践能力を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

A大学看護学科の3年次に成人看護学実習をおこなった97名の学生20グループの中間および最終カンファレンスのグループワーク記録。

2. データ収集方法

20グループは、成人看護学実習慢性期および急性期の中間と最終カンファレンスにおいてグループ内で話し合った内容を記録した。その記録を全体ディスカッション終了後に、指定の回収箱に提出してもらった。

3. 分析方法

20グループの中間および最終カンファレンスのグループワークの記録用紙を、慢性期実習と急性期実習に分け、質的研究を実践している者を含む3名で、それぞれの記録用紙から学生の学びと捉えられる文章を文脈からの意味を推考して一義一文で抽出した。抽出したコードは、学生が捉えた実習の学びの意味内容を変えずに類似した内容を検討しながら抽象度を上げていき、サブカテゴリー、カテゴリー化した。

4. 用語の操作的定義

本研究における看護実践能力は、看護基礎教育において身につける能力として以下のように定義する。

看護実践能力：対象者と関わる基本的な能力を基盤とし、あらゆる健康段階、発達段階の対象に応じた看護を判断し、実践する能力。

5. 倫理的配慮

成人看護学実習を終了した学生に対し、本研究の目的、研究方法、匿名性の保持、研究参加は自由意思に基づくこと、成績には一切影響しないことを文書と口頭で説明した。研究への参加協力の意思は、同意書の提出をもって確認した。中間および最終カンファレンスのグループワーク記録用紙は、グループ名・氏名を削除し、データの匿名性を保持した。本研究は了徳寺大学生命倫理委員会の承認を得ておこなった。(承認番号2818)

成人看護学実習の概要

成人看護学実習は慢性期・急性期それぞれ135時間（3単位）で、慢性期・急性期にある成人期の患者および家族を包括的にとらえ、健康状態に即した適切な看護を実践する能力を養うことを目的としている。それぞれの実習目的・目標は（表1）（表2）に示す。実習は3年次後期におこなった。実習期間は3週間で、4～5病院を使用し病棟実習をおこなった。1グループ学生4～5名に分かれ、各グループに1名の担当教員が指導にあたった。慢性期実習では、おもに慢性疾患の患者を受け持ち、看護を実践した。急性期実習では、全身麻酔で手術を受ける患者を受け持ち、術前から術後の状態に応じた周手術期看護を実践した。

実習の2週目水曜日の中間カンファレンスおよび3週目最終日の最終カンファレンスでは、グループごとにテーマを設定し学びを話し合い、その結果を発表し全体ディスカッションを行った。カンファレンスの詳細は（表3）に示す。

表1. 成人看護学（慢性期）実習目的・実習目標

実習目的	慢性期にある成人期の患者および家族を包括的にとらえ健康状態の変化に即した適切な看護を実践する能力を養う。
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.慢性期にある患者の身体的・精神的・社会的な特徴が理解できる。 2.慢性期にある患者とその家族を理解することができる。 3.患者のQOLを尊重し、セルフケアの維持・向上に向けた援助を実践できる。 4.患者および家族の疾病・障害の受容、疾病コントロールのための行動変容プロセスの支援について理解できる。 5.慢性期の患者に必要な社会資源の活用について理解できる。 6.医療チームの一員としての看護者の役割と他職種との連携のあり方を考え、看護学生として責任ある行動をとることができる。 7.実践した看護体験を総括し、自己の学習課題を明確にすることができる。

表2. 成人看護学（急性期）実習目的・実習目標

実習目的	急性期・周手術期にある成人期の患者および家族を包括的にとらえ健康状態の変化に即した適切な看護を実践する能力を養う。
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.急性期にある患者の身体的・精神的・社会的な特徴が理解できる。 2.急性期・周手術期にある患者とその家族を理解することができる。 3.患者とその家族が心身ともに最善の状態です術に臨むための援助が実施できる。 4.手術後の合併症予防と早期回復にむけた援助を実施することができる。 5.手術・検査後の機能・形態的变化が日常生活に及ぼす影響を理解し、回復状況に応じた日常生活援助が実施できる。 6.退院後の生活を予測して、残存機能を最大限に活用した自立への援助と家族を含めた生活指導について理解できる。 7.医療チームの一員としての看護者の役割と他職種との連携のあり方を考え、看護学生として責任ある行動をとることができる。 8.実践した看護体験を総括し、自己の学習課題を明確にすることができる。

表3. 成人看護学実習 中間および最終カンファレンス

<p>実習2週目の水曜日に中間カンファレンスを行う。 実習3週目の金曜日に最終カンファレンスを行う。 実習グループごとにテーマを設定し、約1時間かけて学生主体のグループワークを行う。 その後発表し全体ディスカッションを行う。</p>

IV. 結果

研究者3人によって学生が捉えた実習の学びを意味内容に沿って分析した結果、成人看護学実習（慢性期）の学生の学びは56コード、16サブカテゴリー、7カテゴリー、成人看護学実習（急性期）の学生の学びは56コード、22サブカテゴリー、10カテゴリーであった。サブカテゴリー、カテゴリーの詳細を表4、表5に示す。学生の学びを示すカテゴリーを【 】で、サブカテゴリーを〈 〉で示した。「 」斜体文字はコードの内容を示す。

1. 成人看護学実習（慢性期）での学生の学び

成人看護学実習（慢性期）での学生の学びは，【患者の全体像を捉えた関わりの必要性】，【患者の変化に気づくための信頼関係の必要性】，【多様な慢性疾患患者を理解する必要性】，【患者が主体的に自己管理できる援助の必要性】，【医療チームによる家族構成に合わせた援助の必要性】，【患者の状況変化を考えながら実践する援助】，【安心できる退院後の生活に向けた援助の実践】の7つのカテゴリーが抽出された。

表4 成人看護学実習（慢性期）の学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の全体像を捉えた関わりの必要性	患者の病気や治療に対する不安
	病態を理解し患者の全体像を把握する必要性
	患者の背景を把握し援助することが必要
患者の変化に気づくための信頼関係の必要性	気持ちの表出には信頼関係の構築が重要
	患者の真意を読み取る観察力の必要性
多様な慢性疾患患者を理解する必要性	患者個々の症状や経過の理解の必要性
	複雑な病態や患者の疾患への思いの理解
患者が主体的に自己管理できる援助の必要性	病状の変化による生命維持や生活への影響
	患者自身の疾患・治療の理解による自己管理の実現
	患者の主体的な行動を促す援助
医療チームによる家族構成に合わせた援助の必要性	治療の経過に合わせた指導の必要性
	患者の背景に応じた社会資源の活用
患者の状況変化を考えながら実践する援助	患者の状況を考えながらの援助
	患者の変化に応じた援助
安心できる退院後の生活に向けた援助の実践	患者の背景や認識を踏まえた計画立案や援助
	退院後の生活を考慮した援助

1)【患者の全体像を捉えた関わりの必要性】

学生は、患者が自己管理を必要とされる疾患のため故に〈患者の病気や治療に対する不安〉があると認識している。さらに、患者の全体像を把握するためには、〈病態を理解し患者の全体像を把握する必要性〉と〈患者の背景を把握し援助することが必要〉であると病態や背景を捉えて関わる要件を学んでいた。

2)【患者の変化に気づくための信頼関係の必要性】

学生は、患者の身近にいる学習から〈気持ちの表出には信頼関係の構築が重要〉と捉え、〈患者の真意を読み取る観察力の必要性〉を認識していた。

3)【多様な慢性疾患患者を理解する必要性】

学生は、慢性疾患を有する患者の体験が個別的なものであり〈患者個々の症状や経過の理解の必要性〉と患者それぞれ同じ疾患でも捉え方が違うと理解していた。また、学生は患者が辿ってきた体験を〈複雑な病態や患者の疾患への思いの理解〉と専門的な知識を基に患者を理解する必要性を認識していた。

4)【患者が主体的に自己管理できる援助の必要性】

学生が患者と対面するとき、患者は疾患の増悪によって入院している最中である。患者の体調の変動をカルテや患者自身の語りと、学習してきた知識と照らし合わせ〈病状の変化による生命維持や生活への影響〉を理解していた。患者の寛解の状態を維持してほしいという期待は、〈患者自身の疾患・治療の理解による自己管理の実現〉と〈患者の主体的な行動を促す援助〉により、患者自身が自分の身体に関心を持ち、主体的に自己管理できるように関わる必要性を学んでいた。

5)【医療チームによる家族構成に合わせた援助の必要性】

学生は、入院時から治療の経過に合わせて、退院後の生活に必要な専門的支援を〈治療の経過に合わせた指導の必要性〉と捉えていた。また、患者の家族背景の違いに応じた支援から〈患者の背景に応じた社会資源の活用〉を学んでいた。

6)【患者の状況変化を考えながら実践する援助】

学生は、「患者自身で発言できない人には、高血糖などの病状を考えて学生から声掛けをすることで、患者の訴えを汲み取る」というように〈患者の状況を考えながらの援助〉を実践していた。また、「必要な援助（感染予防のための清潔ケア）は患者の状態に合わせて、時間を変更することで実施を行う」というように患者の体調を考慮し〈患者の変化に応じた援助〉を実践していた。

7)【安心できる退院後の生活に向けた援助の実践】

学生は、「生活についての情報から退院後の予測される問題についてアセスメントし、予防のためのケアや指導などでアプローチする」といった患者の退院後の生活を想定して〈患者の背景や認識を踏まえた計画立案や援助〉を実践していた。また、「退院後を見据えて、入院中に規則正しい生活リズムを形成する支援をする」というように入院中から〈退院後の生活を考慮した援助〉を実践していた。

2. 成人看護学実習（急性期）での学生の学び

成人看護学実習（急性期）での学生の学びは、【手術を受ける患者の多様性】、【根拠に基づいた観察や疼痛理解の援助の必要性】、【回復に合わせたアセスメント】、【患者を中心とした援助の必要性】、【患者の活動に着目した回復を促す援助】、【短い入院期間を意識した看護介入を行う必要性】、【アセスメントしながら術直後の観察の必要性】、【患者の生命を最大限に保証した手術室看護】、【患者の回復過程に合わせた看護の実践】、【退院後に安心できる効果的な指導】の10カテゴリーが抽出された。

表5 成人看護学実習（急性期）の学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
手術を受ける患者の多様性	人によって異なる手術への思い
	手術を受ける患者の主訴の違い
根拠に基づいた観察や疼痛理解の援助の必要性	根拠に基づいた観察の必要性
	術後疼痛を理解することでの援助の判断
回復に合わせたアセスメント	展開の早さに合わせたアセスメント
	患者の回復に対応するアセスメント
患者を中心とした援助の必要性	手術に対する不安への個別的な援助
	患者の生活を考えた退院指導の必要性
患者の活動に着目した回復を促す援助	疼痛の緩和による活動の変化
	術後の回復を促す援助
短い入院期間を意識した看護介入を行う必要性	入院期間を考慮した計画的な看護の必要性
	術前から術後に向けた看護実践
	術後の回復促進を意識した術前指導
	周手術期の患者の変化を予測する重要性
アセスメントしながら術直後の観察の必要性	術後合併症を早期発見するための観察の必要性
	アセスメントしながら術直後を観察する必要性
患者の生命を最大限に保証した手術室看護	手術中の安全対策の理解
	患者の命を預かる手術室看護師の役割
患者の回復過程に合わせた看護の実践	術後の回復に合わせた計画や実践の修正
	患者個々の回復と捉え方の違い
退院後に安心できる効果的な指導	家族が抱く退院後の不安
	効果的な退院指導の留意点

1)【手術を受ける患者の多様性】

学生は、実習グループ内の学びの共有から、〈人によって異なる手術への思い〉〈手術を受ける患者の主訴の違い〉を学んでいた。

2)【根拠に基づいた観察や疼痛理解の援助の必要性】

学生は、〈根拠に基づいた観察の必要性〉を学んでいた。また、学生が体験をしたことのない手術後の疼痛を解剖生理、疾患・術式の学習からの理解と前日の患者の状況を比較し〈術後疼痛を理解することでの援助の判断〉を見出す学びを得ていた。

3)【回復に合わせたアセスメント】

学生は、手術後の展開の実際から「展開が早いから、常に起こりやすいリスクを考えて行動する」〈展開の早さに合わせたアセスメント〉と「患者の回復をアセスメントして、どこまで介助するかを判断する」の〈患者の回復に対応するアセスメント〉を実践していた。

4)【患者を中心とした援助の必要性】

患者の手術に対する思いを知るためには、「不安はないですか？」という漠然とした質問でのアプローチではなく、患者の背景を知り、普段の自然な会話から〈手術に対する不安への個別的な援助〉をする、

アセスメントすることで患者が気にかけていることを予測した質問が生まれると学んでいた。学生は、患者の退院後の個別的な生活をふまえ〈患者の生活を考えた退院指導の必要性〉を学んでいた。

5)【患者の活動に着目した回復を促す援助】

〈術後回復を促す援助〉と手術後の回復に伴う〈疼痛の緩和による活動の変化〉について、刻々と変化する患者の状態をとおして理解し、患者自身が活動することで回復を目指す看護を学んでいた。

6)【短い入院期間を意識した看護介入を行う必要性】

短期間の入院で患者が最大限の回復をするために、〈入院期間を考慮した計画的な看護の必要性〉、〈術前から術後に向けた看護実践〉、および〈術後の回復促進を意識した術前指導〉と患者側に立った視点で看護を捉えていた。また、術前から術後の早い展開の中で、患者の変化を捉えた〈周手術期の患者の変化を予測する重要性〉を学んでいた。

7)【アセスメントしながら術直後の観察の必要性】

学生は、手術後の患者の不安定な状態を認識しているため、〈術後合併症を早期発見するための観察の必要性〉を捉えている。さらに、手術直後の観察した結果は、時宜を得ていないと異常の早期発見になり得ない、そのため〈アセスメントしながら術直後を観察する必要性〉を学んでいた。

8)【患者の生命を最大限に保証した手術室看護】

学生は、受け持ち患者の手術見学に入る。〈手術中の安全対策の理解〉は、実際の手術を見ることで、どのように安全対策を行っているかを理解していた。さらに、手術室の看護師の動きを見学し、看護師の役割や能力〈患者の命を預かる手術室看護師の役割〉を学んでいた。

9)【患者の回復過程に合わせた看護の実践】

学生は、「術後合併症が生じたときは、計画の評価・修正を繰り返し、患者の状態にあった援助にする」というように手術後の変化が回復であっても、合併症が生じた時であっても、患者にとって最善の援助を考え〈術後の回復に合わせた計画や実践の修正〉を実践していた。患者の疼痛や回復過程の認識は多様であり、〈患者個々の回復と捉え方の違い〉を患者との関わりの中から捉えていた。

10)【退院後に安心できる効果的な指導】

学生は、「退院後にどのように患者の介助をしたら良いか不安に思っている家族もいる」という〈家族が抱く退院後の不安〉を捉えていた。また、「受け持ち時点で生活背景や住居の情報を得ておくことで、退院支援につなげられる」という〈効果的な退院指導の留意点〉を踏まえて指導を実践していた。

V. 考察

1. 成人看護学実習（慢性期）での学生の学び

【患者の状況変化を考えながら実践する援助】が示すように、学生は、疾病の増悪により入院している患者の体調など日々の変化を意識して、〈患者の状況を考えながら〉〈患者の変化に応じた援助〉を実践したと考える。その際学生は、測定や説明、援助として単独に行うのではなく、患者の体調の変動を知識と照らし合わせ、どのように関わるか患者の反応と成り行きを捉えながら判断し、実践につなげていたと考える。また【安心できる退院後の生活に向けた援助の実践】が示すように、学生は、慢性疾患患者の退院後の生活を想定して〈患者の背景や認識を踏まえた計画立案や援助〉〈退院後の生活を考慮した援助〉を実践していたと考える。成人看護学実習（慢性期）では、日々の患者との関わりをとおして、学生の看護を判断するタイミングが実践に反映される時期に変化していたと考える。すなわち、学生は受け持ち患者

にじっくり関わるなかで、その時々患者に応じた看護を判断し実践することができたと考える。

また、【多様な慢性疾患患者を理解する必要性】が示すように、学生は、これまでの実習で身につけた患者と関わる基本的な姿勢をもとに、慢性疾患を有する患者一人ひとりの病の体験に触れ、同じ疾患でも捉え方が異なること、患者が辿ってきた体験を専門的な知識をもとに学びを深めていたと考える。さらに【患者が主体的に自己管理できる援助の必要性】【医療チームによる家族構成に合わせた援助の必要性】が示すように、学生は、患者自身が自分の身体に関心を持ち、主体的に自己管理できるように関わる必要性や、家族構成に合わせた医療チームを視野に入れた援助の必要性を捉えていた。この学生の学びが示す【必要性】には、学生が気づいてはいるが、主体的に実践するには至らなかったことが含まれていると考える。今後、学生が実習で気づいたことを実践につなげていくためには、講義や他の看護学領域の実習との関連を考慮したカリキュラムを工夫していく必要があると考える。

2. 成人看護学実習（急性期）での学生の学び

【回復に合わせたアセスメント】【患者の回復過程に合わせた看護の実践】が示すように、学生は、手術後の展開の実際から〈展開の早さに合わせたアセスメント〉〈患者の回復に対応するアセスメント〉をし、〈術後の回復に合わせた計画や実践の修正〉をとおして、回復過程に合わせた看護を実践できるようになったと考える。また、【退院後に安心できる効果的な指導】が示すように、学生は、手術前の生活背景を踏まえ、〈家族が抱く退院後の不安〉も含めた援助を学んでいたと考える。しかし、手術直後においては学生が経時的に変化する患者の状態をその都度アセスメントし、必要な援助を見出すことは容易ではないと考えられた。【患者の活動に着目した回復を促す援助】【短い入院期間を意識した看護介入を行う必要性】【アセスメントしながら術直後の観察の必要性】が示すように、学生は短い入院期間だからこそ、術前からの関わりが重要だと認識することはできたが、術直後においては患者の回復の速さに実践が追いつけなかったと考える。

3. 成人看護学実習の学びと看護実践能力の関連

学生は、成人看護学実習（慢性期）（急性期）の2つの実習をとおして、受け持ち患者の健康段階、発達段階に応じた看護を判断し実践することを学んでいた。成人看護学実習における学生の学びの【患者の状況変化を考えながら実践する援助】【患者の回復過程に合わせた看護の実践】は、学生が患者の状況を判断しながら、その時々に応じた看護を実践していたことを意味する。このことから、成人看護学実習において学生は、文部科学省の「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」⁸⁾が示すⅡ根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、Ⅲ特定の健康課題に対応する実践能力に取り組んでいたと考える。この学びは、今後学生が患者個々に応じた看護を判断し実践する基盤になると考える。

成人看護学実習（慢性期）で学生は、受け持ち患者にじっくり関わるなかで、その時々患者に応じた看護を判断し実践することにつなげていた。一方、成人看護学実習（急性期）では、患者の回復が速く、術直後においては学生の看護判断が実践に反映されることが難しかったことがわかった。つまり、学生は受け持ち患者と一定期間の関わりをとおして患者にとって必要な看護を見出し、患者に応じた看護を実践できるようになると考える。このことから、成人看護学実習においては、慢性期実習を経たのちに急性期実習をおこなうことで、学生が患者の状況に応じた看護を判断し実践につなげることができることが示唆された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、学生のカンファレンス記録を資料としているため、データ抽出において、学生の文章表現力の影響は否めない。また、入院している患者が高齢化しているため、あらゆる発達段階の患者を受け持ち学んだ内容とは言い切れない。

分析に使用したデータには、3週間の実習の中間から最終日までの経過と、実習の開始時期から終了時期の半年間の経過が含まれている。実習の中間と最終、実習の開始時期から終了時期の半年間では学びの内容に差異があるため、得られた看護実践能力とその時期や程度を同定することはできない。

今後さらに、学生の経年的学びを明らかにすることで、看護基礎教育における看護実践能力を育む実習展開につながると考える。

VII. 結論

成人看護学実習の中間および最終カンファレンスに記述された学生の学びから、以下のことがわかった。

1. 成人看護学実習（慢性期）（急性期）の2つの実習をとおして、学生は健康段階、発達段階に応じた看護を判断し実践することを学んでいた。
2. 成人看護学実習（慢性期）では、日々の患者との関わりをとおして、学生が看護を判断するタイミングが実践に反映される時期に変化していた。このことは、学生が受け持ち患者にじっくり関わるなかで、患者に応じた看護を判断し実践できたことを示す。
3. 成人看護学実習（急性期）では、学生は、患者の入院期間は短いため術前からの関わりが重要と認識することはできた。しかし、術後は患者の回復が速く、学生が看護判断を実践に反映させることが難しかったことがわかった。

VIII. 謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいたA大学の学生の皆様およびご指導いただいた病院の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省（2002）大学における看護実践能力の育成の充実に向けて
（看護学教育の在り方に関する検討会報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm
（2017.11.25 12:00アクセス）
- 2) 文部科学省（2004）看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標
（看護学教育の在り方に関する検討会報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm
（2017.11.19 22:00アクセス）
- 3) 文部科学省（2004）看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標
（看護学教育の在り方に関する検討会報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm
（2017.11.19 22:00アクセス）

- 4) 文部科学省 (2011) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告
http://www.shumei-u.ac.jp/university/info/n_syushi_siryol.pdf
(2017.11.25 14:00アクセス)
- 5) 松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子ほか (2010) 看護実践能力: 概念, 構造, および評価, 聖路加看護学会誌. 14 (2), 18-28.
- 6) 高瀬美由紀, 寺岡幸子, 宮腰由紀子ほか (2011) 看護実践能力に関する概念分析: 国外文献のレビューを通して, 日本看護研究学会雑誌. 34 (4) . 103-109.
- 7) 金久保愛子, 塚本尚子 (2015) 看護基礎教育における看護実践能力の主体的取得に関する文献の検討. 上智大学総合人間科学部紀要. 1, 33-42.
- 8) 文部科学省 (2011) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告
http://www.shumei-u.ac.jp/university/info/n_syushi_siryol.pdf
(2017.11.25 14:00アクセス)